

クラス番号	610	担当教員名	北村 育子
テーマ	認知症高齢者のQOLを維持・向上させるアクティビティ		
著書・論文 研究課題等	研究課題：認知症高齢者の支援に関すること（コミュニケーション技法、介護保険の地域密着型サービス、終末期ケア・看取り、地域包括ケアシステム、専門職の協働、民生委員等地域の諸資源との連携、など）		
ゼミナール概要			
キーワード：			
目的、内容、方法等： 年を取ることをポジティブに捉えることができるとよいが、老化は喪失と機能低下の過程であり、そこにはネガティブなイメージがつきまとう。認知症は、記憶力や判断力が低下し、通常の日常生活を送ることができなくなるのが特徴であり、家族を含め誰かの世話に頼らざるを得なくなる（自立した成人ではなくなる）ため、認知症になることは高齢期における最大の恐怖となっている。 核家族化と女性の社会進出がすすんできていることから、高齢者の多くが、たとえ介護が必要な状況に至っても、子どもには頼りたくないと考えていると言われ、介護保険サービスに対する期待は大きい。介護保険サービスの利用者の大半が現在でも認知症であるが、今後は、利用者の重度化がより進み、認知症高齢者に対するケアの充実は大きな課題である。 認知症になると、知的機能が低下し、やがて見当識が失われ、さらに症状が進行すると、言葉で意思を表現することが難しくなっていく。介護の現場では、経営上の条件から、必ずしも利用者にとって十分な数のスタッフが確保されているわけではない。よって、認知機能の低下した高齢者が自己を表現するための支援を十分に行うことはできていない。すなわち、言語的表現力が低下した際の、自己表現の支援や言語に代わる表現方法の活用は十分に行われていない。 このゼミは、認知症高齢者の支援に関心のある者が、何らかの「楽しい」活動を行い、それを認知症高齢者のQOLの維持・向上のために活用することを通じて、認知症高齢者に対する理解を深めるとともに、卒論を執筆することを目的とする。 参加者は、絵画、漫画、イラスト、似顔絵、詩、楽器演奏、歌、手品やジャグリング、クラウン、ダンスや舞踊、書道、手芸、等々、自分の好きなことや得意なことを、認知症高齢者のQOLの維持・向上に役立てるための方法を計画・実施する。実施の場は、バイト先や自己開拓の他、実習先を活用することが考えられる。			
授業計画： 前期は、自分が行う活動について、それが福祉分野でどのように活用されているかについて調べる。そして、認知症高齢者のQOLを維持・向上させるために、どのような活動を行うことができるかを考える。その上で、ゼミの仲間を相手に、その活動をロールプレイとして実行してみる。 後期は、計画した活動を実施し、記録をとり、記録をまとめてレポートを作成する。			
担当教員からのメッセージ			
このゼミは、各自が自分の好きなことを活用するので、楽しみながら取り組むことができると思います。「得意なこと何もない」という人も、歌を唄うことやリコーダーを吹いたりすることはできるでしょう。唄うことを楽しむことができるのであれば、上手に唄う必要は全くありません。音痴でも構わないのです。つまり、自分が楽しんでやれる何かがあれば、また利用者を楽しませたいという気持ちがあればよく、上手下手は関係ありません。ただし、卒論執筆のための時間は非常に限られています。3年次の初めに4年の秋を見通して計画をたて、それを確実に実行していかななくてはなりません。そのことを自覚した上で、参加してください。 アクティビティの実施にあたって、実習先の実習指導者に協力を求めることは可能だと思います。利用者がアクティビティの機会を得ることを現場は歓迎するはずです。実習中に実施できなくても、終了後、ボランティアとして受け入れてもらえるよう、指導者に頼んでみることもできます。また、そのための支援は行います。			